

岩湧山系の林道を車で走行していると...

ときどき、舗装されていない土の路面から、黒っぽいチョウチョが飛び立つのです。

さらに、岩湧山頂では、ハイキング道「ダイヤモンドトレール」の路面からも、人の気配を察してか、数メートル先でいきなり飛び立つのです。

路面にとまっているときは、黒っぽい色なので気づかないのですが、日光浴をしているのか、翅（はね）を広げているときは鮮やかなオレンジ色が目立ちます。

このチョウチョの名前は「ヒオドシチョウ」、翅を広げると70mmほどのタテハチョウの仲間です。

チョウチョが羽化するにはまだ少し寒いこの時期、元気に飛び回っているのは「越冬」した成虫で、本種と似ている「キタテハ」や「アカタテハ」も同様に成虫で越冬します。

でも...

「キタテハ」や「アカタテハ」は、越冬した成虫が産んだ卵から誕生、羽化した個体（新成虫）を晩秋まで見ることができますし、冬でも暖かな日には飛んでいるところを見かけるのですが、一方「ヒオドシチョウ」の成虫を見かけるのは、越冬後のこの時期（3月～4月中旬）と、新成虫が羽化した6月頃だけなのです。

つまり真夏になると忽然（こつぜん）と姿を消してしまうのですが、いったいどこに行ってしまうのでしょうか？

今の時期に越冬後の個体を見ることができる、ということは、約8ヶ月もの間、どこかで暮らしていたはずなのですが...

暑い夏場は木のうろなどの目立たない場所で「夏眠」と呼ばれる行動をとっているのではないかと考える方や、高山部へ移動してやはり「夏眠」しているのだと考える方もおられるようですが、詳しい生態はよくわかっていないそうです。

さて、「ヒオドシ」という命名の由来は...

翅を閉じてとまっているときは地面と同じような地味な色ですが、突然翅を開くとその鮮やかな「緋色」に驚かされるので「緋おどし」という説がありますが、その他にも、戦国武将が合戦時に着用した「緋緘の鎧」（ひおどしのよろい）の色に似ているから、という説もあるようです。

ちなみに本種の幼虫はというと...

黒いトゲがびっしりと並んでおり、絶対に触りたくないような姿ですし、これがエノキの枝先に天幕を張って集団で葉を食べていますので、まるで「アメリカシロヒトリ」のような気色悪さがあるのです...

【5枚目（最後）の写真は、別の場所で夏に撮影した「ヒオドシチョウ」の羽化後の抜け殻です】









